

料理と食事に関するオノマトペーグルメ漫画『美味しんぼ』の分析一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00057374

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



料理と食事に関するオノマトペ

——グルメ漫画『美味しんぼ』の分析——

経済学類4年 今尾 信之¹

<概要>

ものの状態や状況を感覚的に伝える手段としてオノマトペがある。グルメ漫画では、それを用いることで味わいや食感を適切かつ効果的に私たちに伝えることができる。伝達する際に使われるオノマトペには主に食事する様子を表すものと料理そのものを表すものの2種類が区別できる。前者はその音だけで食材を想像させる表現が多く使われており、後者は味わいを表すものが多く使われる。それぞれのオノマトペに関して、本研究ではどのような形態のオノマトペが多く使われているかを、グルメ漫画『美味しんぼ』を分析対象に調査していく。

<キーワード>

オノマトペ、料理のオノマトペ、食事のオノマトペ、グルメ漫画、表現方法

¹ nobuyuki.imao@gmail.com

<目 次>

1. はじめに
 2. 問題設定
 - 2.1 目的
 - 2.2 先行研究
 - 2.3 リサーチクエスション
 3. 調査と分析
 - 3.1 資料
 - 3.2 対象
 - 3.3 分類
 4. 結果
 - 4.1 (1)料理に関するオノマトペの調査結果
 - 4.2 (2)食事に関するオノマトペの調査結果
 - 4.3 調査結果まとめ
 5. 考察
 - 5.1 (1)料理に関するオノマトペの考察
 - 5.2 (2)食事に関するオノマトペの考察
 - 5.3 考察まとめ
 6. おわりに
- 文献

1. はじめに

オノマトペとは「ぱくぱく」や「しっとり」などの擬音語や擬態語のことである。オノマトペは、一般的な形容詞や形容動詞などでは伝えきれない事物の微妙なニュアンスや印象を感覚的に伝える際に頻繁に使われる表現である（渡辺・中村，2015）。それらは、漫画やテレビCM、販売店の説明欄などのさまざまな媒体の中で、ある特定の事物について付加的な説明をする。オノマトペは私たちの生活の中に溶け込んでおり、目や耳にただけで事物や事態の情報をより適切かつ効率的に伝えることができる。たとえば、自分の身体の状況を表現するときに、「頭がズキズキ痛む」と「頭がガンガン痛む」とでは受け取る印象がかなり違うであろう。前者は傷がうずくようなイメージがあり、頭に外傷を負って頭が痛いのであろうと推測できる。他方、後者は揺れるような痛みをイメージさせ、頭の内部が痛いに違いないと推量できる。このように、「頭が痛い」という状態にオノマトペで説明を追加することで、その痛みをより詳しく語るができる。しかしながら、実際に使用されるオノマトペには何らかのトレンドがあるのではないかというのが本研究の出発点となる主な問いである。今までに使われていないような新規性のある表現を使用することで、そのオノマトペを目や耳にした人の興味を引く効果があると考えられるからである。

2. 問題設定

2.1 目的

そもそもオノマトペに興味を持ったのは筆者の実体験がきっかけになっている。あるイタリア人青年と話す機会があり、その青年は、「日本の食品、その中でも特にパンには『ふんわり』や『しっとり』という言葉が多く使われている。自分たちにとってパンは固い物だというイメージがあるから、日本を訪れた観光客や留学生にとって、ああいったパンは受け入れがたい」といったことを話してくれた。日本のパン業界でトップシェアを誇る山崎製パンの商品の中に「ふんわり食パン」という名称のパンがあり、販売店のPOP広告ではなく商品名にそのまま柔らかさをイメージさせるオノマトペが使われている²。しかし、小売店で販売されているパンは柔らかいパンだけではなく、外国人が好むような固いパンも存在する。それにもかかわらず、イタリア人青年が日本には柔らかいパンしかないと思い込んでしまったのは、少なからずオノマトペによる影響があったのではないかと考えた。そこで、本研究ではオノマトペが使われる様々な媒体の中でも記録に残り、比較がしやすい漫画に焦点を当てて調査を実施し、使用されるオノマトペの傾向を明らかにすることを目的とする。

² <https://www.yamazakipan.co.jp/product/01/index.html> より

最終閲覧日 2019年10月27日

2.2 先行研究

料理のオノマトペに関する先行研究はかなりの数がある。たとえば、レシピを対象にした研究として渡辺・中村(2015)があるが、そこでは「cookpad」と呼ばれるレシピ・サイトを用いた研究を実施している。彼らは「あっさり」や「こつてり」といった味覚や食感を表現するオノマトペを用いてレシピを検索する「オノマトペロリ」というシステムを構築した。彼らが実験目的で「cookpad」から入手したレシピは73,259件あるが、その内オノマトペが含まれているのは、わずか2割である。彼らが研究対象としたオノマトペは(1)調理された結果としての料理そのものを表現するオノマトペと(2)調理の動作を表現するオノマトペである。しかしながら、食に関するオノマトペという範囲の中には調理の際だけでなく、食事という行為の際のオノマトペも含まれる。ところが、それについて調査はなされていない。ところで、グルメ漫画は、調理やその結果としての料理だけでなく、食事の際のオノマトペも出現する。しかしながら、食事行動という観点からグルメ漫画を題材にしたオノマトペの研究はない。

オノマトペの新たな用法については、福留(2018)が、オノマトペを視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感で捉えようとしている。この研究の中で「甘辛い」という表現に注目した、次のような記述がある。

日本で「甘辛い」といえば、しょうゆと砂糖で味をつけたすき焼きや牛丼、肉じゃがなどの味を思い浮かべる。しかし、最近の大学生に聞くと、「甘辛い」の辛いはスパイシーな辛さのことで、しょうゆと砂糖なら「甘じょっぱい」という人もいる。「辛い」という字から唐辛子のホットな辛さ、いわゆる「ぴり辛」を連想する人が増えているようだ。言葉の動態性を感じる。

筆者は「甘辛い」という表現になじみがなく、それは同じ年代の他の人たちにも当てはまることかもしれない。言葉の動態性は「甘辛い」のような表現だけでなく、オノマトペにも見られるのではないか。つまり、食の表現技法において消えゆく表現もあるはずだ。逆に、新しい表現が出現する可能性もある。他にも、聴覚の観点から、西洋では食事の際、音を立てるのはマナー違反だが、日本では麺類を食べるときはマナー違反ではないと指摘されている。落語の演目において、噺家はそばやうどんを音で聞き分けさせる。しかし、それを文字で表記しようとすると難しくなる。

以上のことから、食に関するオノマトペの研究はなされているものの、漫画を資料とした研究はない。そこで、本研究ではグルメ漫画を題材にして研究を進めていく。

2.3 リサーチクエスト

本研究では、以下の2つのリサーチクエストを設定し、調査を進めていく。

2.3.1 リサーチクエスト1

1つ目のリサーチクエストを挙げる。

「パクパク」や「モグモグ」といった繰り返し表現(畳語)が好まれるのではないか。

食事の様子を表すには連続性を示すことが鍵となる。特にグルメ漫画であれば出てくる食材はほとんどが美味しいとされるものであり、それらが食べ進められる過程が描写される。そうだとすれば、「パク」や「モグ」よりもそれらを重ねた畳語「パクパク」や「モグモグ」のほうが、口に入れる回数が1回でないことを示すためや咀嚼過程を表すのに使われる可能性が高いのではないだろうか。また強調するという意味でも、食事ではなく料理自体を表す時に繰り返し表現が使われると考えられる。例えば「モチッ」という表現よりも「モチモチ」の方が弾力を感じるのではないだろうか。本研究が調査対象とするグルメ漫画では、オノマトペは付加的説明の意味が強いので、より強調するために繰り返し表現が使われると予想する。

2.3.2 リサーチクエスト2

2つ目のリサーチクエストは次のとおりである。

使用対象が限定される表現より他にも利用可能な汎用表現が使われるのではないか。

上述のとおり、オノマトペは相手に事態を感覚的に伝えるための手段である。そのため、料理や食材に限らず、オノマトペを見て喚起されるイメージが等しいものでなければならない。たとえば、アイスクリームを食べたとき、「しっとり」しているのか、それとも「ざらり」としているのか、アイスクリームという食材に対して使うのはどちらも間違いではないが、どちらかに決定できる具体的な要因が存在しない場合には、どちらでもない汎用的な「ひんやり」といった表現で相手に食材のイメージを漠然と伝えるのではないかと考える。

3. 調査と分析

3.1 資料

本研究では、グルメ漫画『美味しんぼ』(雁屋哲原作・花咲アキラ画、小学館、1985-2014)全111巻を調査資料とする。グルメ漫画を資料としたのは、食材の

様子を表すオノマトペに加え、渡辺・中村(2015)では調査対象とされていなかった食事の様子を表すオノマトペが多く出現すると考えたからである。グルメ漫画の中から『美味しんぼ』を選択した理由は、現存する食材しか扱っていないことと、長期連載作品であり同一作品内で数多くの表現を発見することができると思ったからである。

3.2 対象

収集し、調査する対象は『美味しんぼ』に出現する(1)調理された結果としての料理そのものの様子を表すオノマトペと(2)食事という行為の様子を表すオノマトペの2種類である。調査対象としてカウントするオノマトペの基準は、以下のとおりである。

- ・同一表現でもひらがなとカタカナの表記を区別する。
- ・調理の様子を表すオノマトペはカウントしない。
- ・複数の意味を表すオノマトペについては料理の風味に言及されているもののみを対象に数える。
例)「すっきり」
これを食べて胃が「すっきり」する。→ 数えない。
このスープは「すっきり」している。→ 数える。
- ・同一表現の繰り返しは1回もしくは2回以上として数える。
例)「モグ」
モグ→「モグ」を1回とする。
モグモグ→「モグ」を2回ではなく、「モグモグ」を1回とする。
モグモグモグ→「モグモグ」を1回とする。
- ・料理そのものを表すオノマトペは、主に吹き出しの中に表現されるものに限定する。つまり、食事中およびその前後でなされる感想会話で料理そのものに言及する表現をカウントする。
- ・食事を表すオノマトペは、主に吹き出しの外側で描写される表現に限定する。つまり食事をしている最中のコマに登場する口の動きなどを表す、食事行為そのものに関する表現をカウントする。ただし、吹き出しの中に出現する「パクパク食べ進められちゃう」などの表現も食事そのものに関するものとしてカウントする。

111巻ある資料から調査対象のオノマトペを収集する際、1巻毎にデータを取るよりも数冊まとめて集計した方が、傾向がつかみやすい。そこで、データは1～10巻、11～20巻というように10巻毎に区切ることで年代毎の使用状況を踏まえた調査を行う。

3.3 分類

料理に関するオノマトペの分類方法は、吉永(2019)を参考にした。吉永(2019)は、分類の方法として長音「ー」、「ン」、「ッ」および「リ」の4種類に注目し、それ以外の音節を「X」や「Y」といった記号で置き換えることでパターン化し、「XY リ」(たとえば、「ふわり」)等の組み合わせでオノマトペを分類している。本研究では、それらがどのような特徴をもたらすのかは主題ではないので、分類の方法だけを参考にし、音節を「A」、「B」、「C」に置き換え、カタカナで表されていた「ン」、「ッ」、「リ」をひらがなの「ん」「っ」「り」とし、「AんAん」(たとえば、「きんきんに」)や「ABり」(たとえば「ぱくり」)と表す。吉永(2019)は、対象とするオノマトペを食に関するものに絞っていないが、本研究は食に関心があるので、あくまで『美味しんぼ』に登場する、食に伴うオノマトペの形態のみを分析対象とする。

食事行為に関するオノマトペは、母音の組み合わせで分類する。それは、口の動きを分類するのに最適だと考えられるからである。私たちは基本的に食べるときにはあごを動かす。そのあごの動きに合わせたオノマトペがよく使われる傾向にあるのではないかと予想したのである。一文字目がオノマトペの最初の文字の母音であり、二文字目はオノマトペの最後の文字の母音である。たとえば「パクッ」というオノマトペを分類するならば最初の文字の「パ」の母音である「a」と、最後の文字の「ク」の母音である「u」の組み合わせである「au」の形態に分類する。「uっ」(たとえば、「ズッ」)のように母音を含むオノマトペが一文字のみの場合はそれぞれ「uu」(たとえば、「ズズ」)とは区別して数えるが、母音が二文字以上存在するオノマトペにおいては、最後の文字が「っ」や「ー」で終わっている場合でもその1つ前の文字の母音で分類を行った。

4. 結果

『美味しんぼ』第1巻～第111巻の中に出現する、上記の条件に合うオノマトペは423種類あった。そのうち調理された料理そのものの様子を表すオノマトペは253種類であり、食事行為の様子を表すオノマトペは170種類であった。それら全てをオノマトペの形態で分類し、分析を行う。

4.1 (1)料理を表すオノマトペの調査結果

料理そのものを表すオノマトペは合計で253種類が確認できた。そして、それらを形態毎に何種類存在するかを分類したのが表1である。

表1に示されているように、料理を表すオノマトペを形態別に分類し、多い順に並べると「ABAB」(たとえば、「もちもち」)が104種類、「AっBり」(たとえば「すっきり」)が48種類、「ABっ」(たとえば「パリッ」)が39種類、「ABり」(たとえば「さらり」)が19種類であり、これらの上位4種類が料理を表すオノマトペの83%を占めることが分かる。それらに次いで「AB」(たとえば「クニユ」)と「AんBり」(たとえば「ふんわり」)が8種類、「ABんABん」(たとえば「ぶる

んぶるん」と「Aーっ」(たとえば「ジュース」)が5種類、「ABん」(たとえば「つるん」)が4種類、「AっB」(たとえば「ザッパ」)と「AっBC」(たとえば「ふっくら」)が2種類ありそのほかは1種類ずつという結果になった。

表1 料理を表すオノマトペの形態別調査結果

形態	
ABAB	104
AっBり	48
ABっ	39
ABり	19
AB	8
AんBり	8
ABんABん	5
Aーっ	5
ABん	4
AっB	2
AっBC	2
ABりABり	1
Aー	1
Aっ	1
ABーC	1
AーB	1
ABーり	1
ABCり	1
ABCん	1
ABC	1

次に、「ABAB」や「AっBり」等の形態毎に料理に関するオノマトペが、マンガの10巻毎の区切りの中で何回登場したかを表したのが、次の図1である。

図1を見ると、料理に関するオノマトペでは「AっBり」がどの区切りにおいても出現する回数が一番多く、それに次いで「ABAB」がどの区切りにおいても多く存在することが分かる。この2つ以外の形態は、それらを除いた図2で表す。

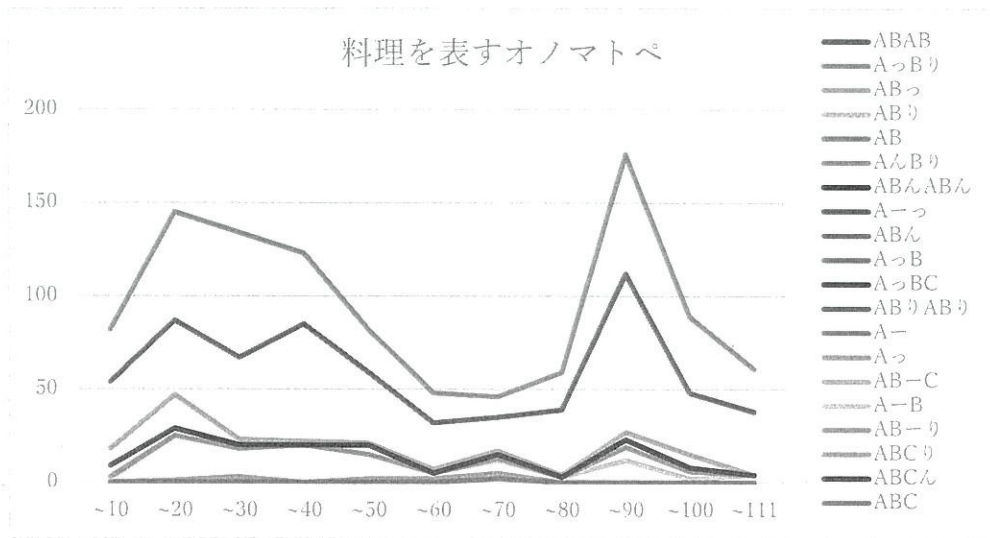


図1 料理の様子を表すオノマトペの出現回数

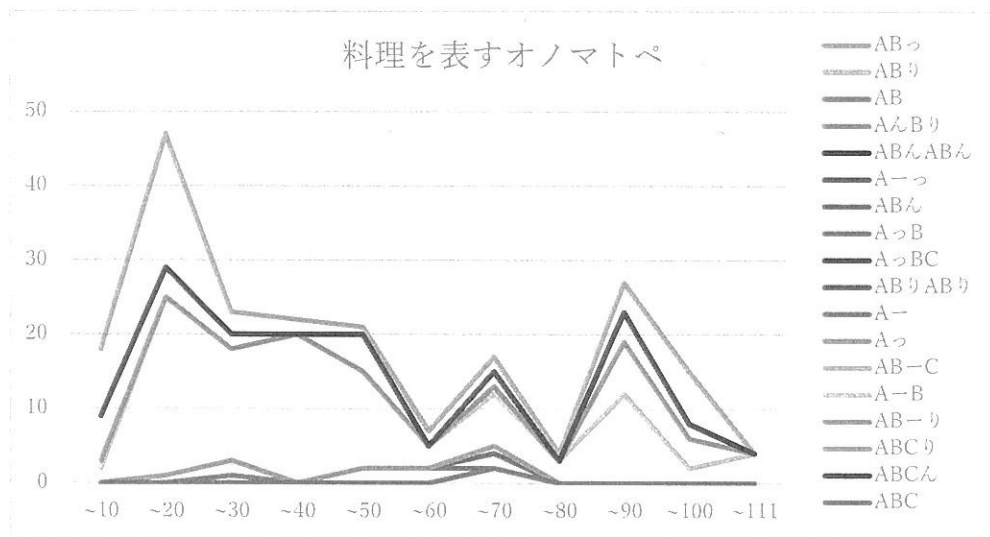


図2 「AっBり」と「ABAB」を除いた料理の様子を表すオノマトペの出現回数

「AっBり」「ABAB」を除くと「ABっ」が一番多く出現している。それに次いで「AっBC」が多く登場しており、「AんBり」と「ABり」がほとんど同じ様相で推移している。その他は「ABCり」の登場回数が少しだけ上回っているが、基本的に横ばいである。また、「AっBり」「ABAB」と同様に、10巻毎の区切りにおいて登場回数の順位はあまり変化していないことが分かる。これらのデータから、回数に注目すると「AっBり」と「ABAB」、「ABっ」と「AんBり」と「ABり」、そしてそれ以外という3グループに分けることができる。すなわち、「ABAB」「AっBり」という頻出

するグループ、次に「ABっ」「AっBC」「AんBり」「ABり」という比較的多く登場するグループ、そしてそれ以外のあまり出現しないグループの3つである。

4.2 (2)食事に関するオノマトペの調査結果

食事行為を表すオノマトペは合計で 170 種類あり、それらが形態毎に何種類存在するかを分類したのが表 2 である。食事を表すオノマトペに関しては、(1)料理を表すオノマトペに比べて「ABAB」「ABっ」のような形態で分類すると、種類が少なかったため 3.3 で述べたような分類の仕方で作成した。

表 2 食事を表すオノマトペの形態別調査結果

uu	50
au	28
ua	18
ai	9
aa	8
ou	8
uー	7
uo	7
oi	7
ao	4
uっ	4
ui	4
eo	3
ia	2
ea	2
oo	2
iu	1
io	1
oっ	1
oa	1
その他	3

表 2 の結果について言えることは、「uu」(たとえば、「ズズ」)が 50 種類と一番多く、それに続いて「au」(たとえば、「パク」)が 28 種類であり「ua」(たとえば、「フハ」)が 18 種類存在している。最初の母音のみに注目すると「u」が 90 種類(たとえば、「ムグ」)、「a」が 49 種類(たとえば、「パク」)、「o」が 19 種類(たとえば、「モグ」)、「e」が 5 種類(たとえば、「ペチャ」)、「i」が 4 種類(た

たとえば、「ピチャ）」という結果になった。また、最後の母音のみに注目すると「a」が31種類(たとえば、「フハ」)、「i」が20種類(たとえば、「パリ」)、「u」が20種類(たとえば、「モグ」)、「o」が17種類(たとえば、「ペロ」)、「e」が0種類という結果だった。次に、「aa」や「ao」等の形態毎に食事に関するオノマトペが、マンガの10巻毎の区切りの中で何回登場したかを表したのが、次の図3である。

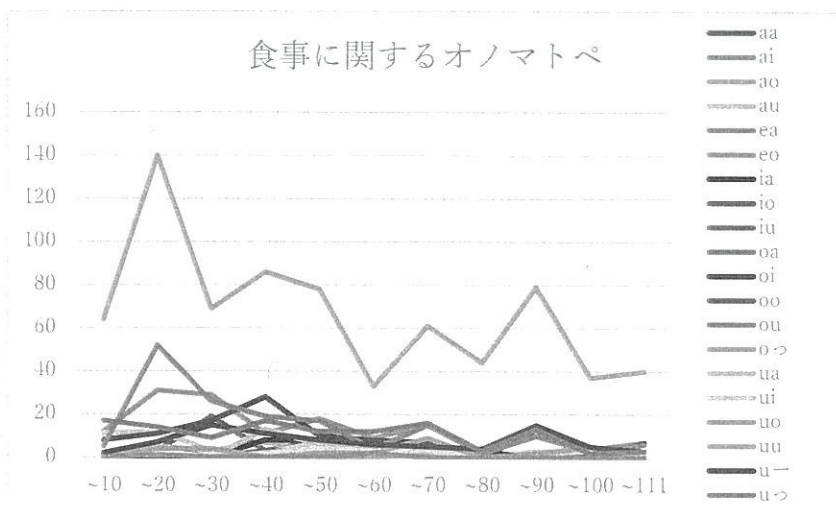


図3 食事の様子を表すオノマトペの出現回数

図3から「uu」が他の形態と比べて圧倒的に数が多いということがわかる。そこで(1)料理の様子を表すオノマトペの時と同様に、「uu」を除いたグラフを作成し、「uu」以外の形態についての結果を図4に示す。

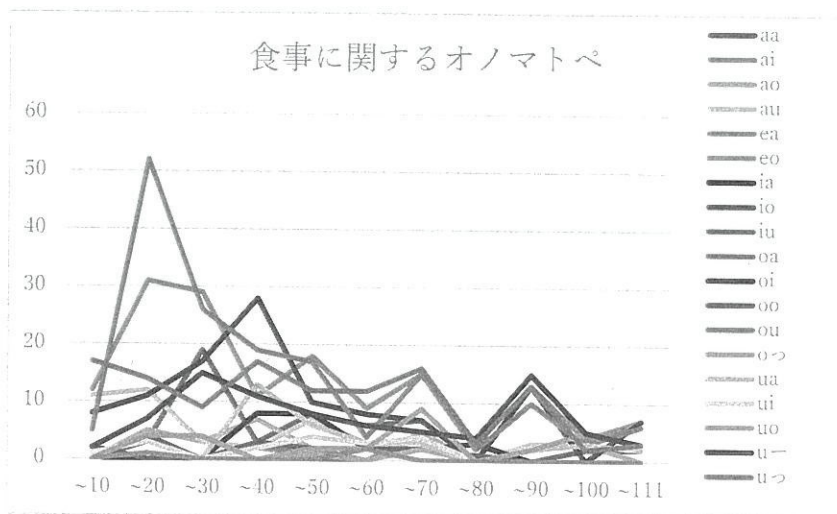


図4 「uu」を除いた食事の様子を表すオノマトペの出現回数

図4から、「ou」と「ai」がおおよその区分で登場回数が上位を占めているが、(1)料理に関するオノマトペの結果と比べてみると、登場回数の順位の移り変わりがかなり激しく、ある一定の母音が常に多く登場するといった傾向はあまり見られないことが分かる。

4.3 調査結果まとめ

(1)料理に関するオノマトペと(2)食事に関するオノマトペに共通する結果は、いくつか飛び抜けて数値が高い形態があることである。(1)料理に関するオノマトペに関しては、形態毎に分類したときに種類は「ABAB」と「AっBり」が特に多く存在し、10巻毎の区切りでオノマトペが出現した回数をカウントした結果はやはり「ABAB」と「AっBり」が顕著に多いという結果だった。それ以外のオノマトペについては、回数に順位をつけた場合、その順位がほとんど変動することがないことが分かった。

また、(2)食事に関するオノマトペに関しては「uu」と「au」、そして「ua」の順に登場したオノマトペの種類が多いという結果だった。漫画の中で出現した回数を数えると「uu」だけ圧倒的に数が多い。それ以外では、種類の数はそれほど多く無かった「ou」（たとえば、「モグ」）が「uu」に次ぐ上位に属し、それに続いて「ai」が多い。ただし、(1)料理に関するオノマトペと違うのは、順位の変動が激しいということである。

5. 考察

5.1 (1)料理に関するオノマトペの考察

上節4.1から分かることは、「ABAB」と「AっBり」に関して、それぞれに該

当する種類の数と漫画に登場する回数を比べたときに、回数の多さが反比例していることである。種類の数では「ABAB」が104種類であり、「AっBり」が48種類である。しかし、出現回数に関してならば、10巻毎の区切りならばどの区間であっても「AっBり」の方が「ABAB」よりも多く出現している。また、「ABAB」の中で「パリパリ」が20種類の食材を表す際に使われていた。「パリパリ」というオノマトペで表現できる食材の多くは揚げ物であり、特にその皮の状態を指していることが多かった。それに対して、「AっBり」の中では「あっさり」が57種類の食材を表す際に使われていた。「あっさり」というオノマトペは、揚げ物であってもその味付け次第で「あっさり」した味わいに行えるように、食材との関連は見られなかった。「こったり」もラーメンなどの54種類の食材を表す際に使われていた。他のオノマトペに関しても、「ABAB」よりも「AっBり」の方が平均的に多くの種類の食材を表すのに使用され、結果として「AっBり」が料理を表すオノマトペとしては汎用性が一番高いことが分かる。

逆に、「AっBり」は汎用性が高い分、オノマトペだけでその食材をイメージすることは難しい。他の「AっBり」として挙げられるのは「さっぱり」や「すっきり」であるが、これらの表現ではその食材がどのような味付けかは分かっていても食感を伝えることには適していないのである。そこで「ABAB」の中の「ふわふわ」や「シャキシャキ」といった表現を使うことが求められることになる。つまり、「ABAB」と「AっBり」は用途が異なっており、前者は「もちもち」や「ふわふわ」のように食材の味わいがどのようなものを表す時に使い、後者は「あっさり」や「さっぱり」など食感がどのようなものを表す時に使うのである。そのため、単なる回数だけでどちらの表現が好まれるということを決めるのは難しい。「AっBり」以外のオノマトペの形態は、ほとんどが食感を表すものであり、用途で区切るならば「AっBり」の出現回数が多いのは十分に納得のできることである。さらに、食感を表すオノマトペ、つまり「AっBり」を除いた料理を表すオノマトペという観点から見ると、上述のように「ABAB」が圧倒的に多いので、食感などを表すにはこの形態が一番使いやすいのではないだろうか。

5.2 (2) 食事に関するオノマトペの考察

ここで、上節4.2で見たように、種類の数、出現回数ともに「uu」が一番多いことが分かっている。このような結果になった原因は麺類にある。普段私たちは、食事をする際音を立てることはマナー違反とされている。しかし、それにのっとって漫画や小説の食事のシーンが無音ばかりであったら、読者に食事の様子を伝えることはほとんど不可能である。そこで、オノマトペを使って食事をする際の様子を伝えようとする。この「音を立てずに食べなければならない」というマナーをひっくり返すのが麺類である。日本の食文化に親しみがない文化圏の人々はそうしない人が多いかもしれないが、麺類というのはすすって食べても良い、むしろすすって食べた方がおいしいとさえ言われている。そして、普段音を出して食べているということは、その音を使うことで食事の様子を簡単に表

現できるということである。実際に「uu」（たとえば、「ズズ」）には 68%が麺類や汁物の表現をする際に使われている。「au」（たとえば、「パク」）と「ou」（たとえば、「モグ」）を除く母音の最後の文字が、「u」で終わるオノマトペや「ua」（たとえば、「クチャ」）に関しても同じようにほとんどが麺類を表現する際に使われていた。

では反対に「au」と「ou」は麺類以外の何に使われていたのかというと、それらは(1)調理された料理の様子を表すオノマトペの「AっBり」と同じように汎用性が高いため限定することはできなかった。「パク」や「モグ」等の食材の温度や大きさ、また味わいに関係なく食べることそのものを表しているオノマトペが多く存在した。しかし、図4を見ると「ou」は確かに出現回数が多いが、それに比べて「au」は少ない方に分類される。第1巻～第10巻の区切り以降、上昇と下降を繰り返しながら徐々に出現回数が減っていることから、「au」はあまり使われなくなってきている表現と言えるだろう。

食材に関係なく食べる様子「au」よりもかなり多く使われている「ai」や「oi」はどのような表現なのだろうか。これらは「au」と「ou」が「AっBり」と同じ使われ方をしていたように、「ABAB」と同じなのである。「ai」と「oi」は「ABAB」以上に使われ方が限定されている。「ai」は「カリ」や「パリ」のように堅い物を、歯を使って折りながら食べている様子にほぼ使われる形態であった。「oi」は「コリ」や「ポリ」など「ai」ほど歯を使うことを前面に出してはいないが、食感がしっかりしている固い物を食べる際によく使われている形態であった。これらの表現は、「uu」と同様に音で食材を表現できることから好んで使われたのではないかと考えられる。「ai」であれば、堅いものであることに加え、乾いた音であるため、せんべいのような食材が想像しやすく、「oi」であれば潰け物を食べる時の音に似ているだろう。このことから、出現回数に関しては、「au」や「ou」のように食事の様子そのものを表す場合に使われるだけでなく、「ai」や「oi」などのように、使える食材が限定的な物に対しても多く使われていることが分かる。

5.3 考察まとめ

上節 5.1 では、主に種類が多く、出現回数も多かった「AっBり」と「ABAB」に注目し、「AっBり」が種類の数では「ABAB」に劣るが、出現回数では逆に「AっBり」の方が多く、それはなぜなのかを考えた。考えられる要因としては、「AっBり」に属する「あっさり」や「こってり」等のオノマトペが特定の食材を表す物ではなく、汎用性が高いから種類が少なくても出現回数が多いのではないかと解釈した。また、「ABAB」を始めとするほとんどが食感を表すオノマトペであるのに対し、「AっBり」が味わいを指すので、他にそのような使われ方をするオノマトペがないという点で出現回数が多いと考えられる。

上節 5.2 では、食事の様子を表すオノマトペについては、音を使う表現が好まれることが分かった。種類、出現回数ともに一番多いのが「uu」であり、「ai」

や「oi」等の食べる際の音で食材を表現できるオノマトペが「uu」に次いでよく使われていた。それらはただ漠然と食事する様子を表す「パク (au)」や「モグ (ou)」よりも多く使われていることから、食事をする様子を表すオノマトペは、使える食材が限定的な物に使われることが分かった。そして、これは料理の様子を表すオノマトペに関して、使う範囲が限定的でない「A っ B り」の登場回数が一番多いことを考慮すると、料理そのものの様子を表すオノマトペとしては包括的な表現が好まれるのに対し、食事行為の様子を表すオノマトペとしては限定的な表現が好まれるということであろう。

6. おわりに

繰り返し表現の畳語が多く使われるのではないかとという 1 つ目のリサーチクエスションに対しては、(1)料理に関するオノマトペの「ABAB」がそれに該当すると考える。資料の中では「ABAB」は出現する種類こそ多いが、出現回数では「A っ B り」には及ばなかった。そのため、一番多く使われている表現であるとは言えない。ただし、「A っ B り」の汎用性が高いという理由で出現回数が一番多いのだとすれば、これからの表現の利用可能な余地は「ABAB」にあるだろう。汎用性が高いというのは、今までにない食材や料理が登場しても、今までの表現でこと足りるということである。それに比べると「ABAB」は新しい食材や料理が登場した場合に、新しい表現を必要とするということである。そのため、『美味しんぼ』が『ビッグコミックスピリッツ』に連載されていた 2014 年までは「A っ B り」の方が多く使われていたとしても、今後はその状況が変化する可能性があるということである。

次に、用途が限定的な表現より包括的な表現の方が好まれるのではないかとという 2 つ目のリサーチクエスションに対しては、(1)料理の様子を表すオノマトペと(2)食事の様子を表すオノマトペで異なる答えが出た。料理の様子を表すオノマトペに関しては、リサーチクエスションは肯定された。出現回数の多かった「A っ B り」は食感ではなく味わいを表すため、多くの食材の表現に使うことができ、それがそのまま出現回数の多さにつながったと考えられる。しかし、(2)食事の様子を表すオノマトペに関しては、食事の際に音が出る食材に対して使われていることが多く、「パク」や「モグ」より、使える食材の範囲が限定されるオノマトペが使われていた。そのため、食事の様子に関するオノマトペについては、リサーチクエスションは肯定されないことになる。

本研究の問題点としてあげられるのは、基本的にデータが限定的であったということである。『美味しんぼ』自体は 111 巻もある長編漫画であるが、漫画の種類としては 1 種類に過ぎない。それによって作者によるオノマトペの個人的な好みなどが漫画の表現に反映されている可能性が排除できない。また、対象とした漫画が 1 種類であったために、(2)食事の様子を表すオノマトペが、(1)料理そのものを表すオノマトペと同じような分類ができるほど種類が収集できなかった。そのため、料理そのものと食事行為の様子を表すオノマトペで分類の仕方

が異なり、両データ間の比較ができなかった点も問題である。もし、他のグルメ漫画で『美味しんぼ』より多くの種類が確認できたならば、作者によるオノマトペの偏りが多少は改善されるだろうし、データとして信頼度がより上がるだろう。今後の課題としたい。

文献

- ・ 中里理子(2017): 『オノマトペの語義変化研究』 勉誠出版.
- ・ 渡辺知恵実・中村聡史(2015): 『オノマトペロリ: 味覚や食感を表すオノマトペによる料理レシピのランキング』.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/tjsai/30/1/30_30_340/_pdf
- ・ 福留奈美(2018): 『食べ物と食感を表すオノマトペ: 食文化の感覚的共有における役割 Food and Onomatopoeia for texture expressions: the role it plays in shared sensory appreciation in food culture』.
https://www.jcss.gr.jp/meetings/jcss2018/proceedings/pdf/JCSS20180S0_9-6.pdf
- ・ 吉永 尚(2019): 『オノマトペの語形パターンに関する一考察』
<https://www.sonoda-u.ac.jp/tosyo/ronbunsyu/%E5%9C%92%E7%94%B0%E5%AD%A6%E5%9C%92%E5%A5%B3%E5%AD%90%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E8%AB%96%E6%96%87%E9%9B%8653/075-081.PDF>